

のであり、ストアと同じように語っているようでも、同じことを理解しているわけではなく、ある意味ではストアの観点を逆転させてもいるのである。そのため、ストアがそれ以前の古代思想を自らの形にアレンジして中世に伝えたように、彼らもストアの思想を主意主義的に翻訳して、近世へと伝えたのであり、近代における理性と自由との一致も、主意主義に媒介されたストアの変容として理解しなければならないのかもしれない。

---

### 〈特定質問〉

## ストア主義の中世哲学への影響

山内 志朗

ストア派倫理学の中世哲学への影響、特にドゥンス・スコトゥスへの影響となると、厄介な作業を乗り越えなければならない。トマス・アクィナスの場合であれば、直接ストア派のテキストへの言及があるが、スコトゥスの場合、ストア派の思想家、テキスト、特徴的概念への言及はほとんど存在していないからだ。しかしながら、スコトゥスの「主意主義」には、ストア派も「主意主義」と整理できる以上、スコトゥスの中にストア主義を見出すことは重要な見通しであり、またその論点を探求することで、隠れた水脈を仮定することができるかもしれない。

報告者は以上の点について十分慎重であるが、それはやはり穏当なことと思われる。主意主義と主知主義の対立という設定が一九世紀以降の哲学的整理に依拠しており、多分にアナクロニズムの危険が見られるのである。もちろん、アレントが『精神の生活』で展開したように、トマスとスコトゥスを主知主義と主意主義の典型として整理する枠組みもあるから、そしてそのようにテキストを読むことも十分可能だから、主意主義と主知主義の対立図式に依拠してしまいたくなる。

報告者の採る道筋は以下の通りである。スコトゥスのテキストの中にス

トア派の明確な痕跡は見つけにくい。スコトゥスの思想も時間の流れの中で変化しているが、それはヘンリクス思想への姿勢そのものが変化したためである。スコトゥスの思想を理解するのに、ヘンリクス思想を理解することが不可欠だが、ヘンリクス思想そのものについて研究が進行中であり、またなかなか難解である。にもかかわらず、ヘンリクス思想は明確に主意主義的であるし、またストア派の影響は強く見出される。

したがって、ヘンリクスへのストア派の影響と、ヘンリクスにおける主意主義的特質を整理することが必要になってくる。スコトゥスを論じるための準備作業ではありながら、このヘンリクスに関わる作業はかなり難儀な作業を経なければならない。このような報告者の作業仮説には大いに賛同する。報告者は果敢にその作業を行う。本来これだけでも特別報告の論題になるところである。さらに、ヘンリクスとスコトゥスの関係については、1302年以降、ヘンリクス批判の矛先を緩めたという難題があり、それをどう評価し、スコトゥス思想の発展に組み込むのかという難題もある。

このような幾重にも重なる難題を踏み越えなければ、ドゥンス・スコトゥスへのストア派の影響を論じることはできないのだが、ほとんど影響関係はないというのが、その結論になるのだと思われる。

その際確認すべきなのは、ストア派が中世哲学に直接どのような影響を及ぼしたのかということを確認することではない。むしろ、ストア派という参照枠を準備することで、新しい道筋を見出すことが今回の企画の主眼だったのであり、たとえスコトゥスの中に、ストア派的な「主意主義」が見出されなくても、その作業はきわめて有益なものと思われる。この点はシンポジウムの意義に関わるところであり、確認しておくべきことだ。

その上で、ヘンリクスにおけるストア派思想、スコトゥスのヘンリクス理解と批判とその時間的変化、スコトゥスにおけるストア派思想、という論点が錯綜して登場するので、その点を整理しておくことは重要と思われる。

その点から、整理のために確認しておきたい点を挙げておく。本報告において、ストア派とヘンリクスとの関係は『任意討論集』第一三問「未来の生を希望しない者も正しい理にしたがって国家のために死を選ぶべきか」の分析を通して、アリストテレスの倫理学との関係、ストア派の倫理学の関係が丁寧に示されている。つまり、共通善と私的善とに関して、アリストテレスとキケロの整理に対して、ヘンリクスがどのような態度をと

ったかのうちに、ストア派の影響は明確に見出される。ここまでの筋は明確である。

しかし、その後のゴッデフリドゥスとスコトゥスが出てくると、様子が変わり、話が錯綜したものになってくる。もちろん、これは事柄の錯綜によるもので、避けられないことだ。ここで、私の視点からスコトゥスの主意主義へのストア派の影響の筋道を探すために考えたいのは、ストア派の倫理学が情念への対処法を一つの軸にしていることだ。

ストア派の特徴を考える場合、アパテイアを避けるわけにはいかないだろうが、パトス (pathos = affectus, passio) を人間行為の評価の枠組みのなかにどのように位置づけるかは、その倫理学全体の性格を決定するからである。しかしながら、スコトゥスは直接ストア派のパトスに言及することはないし、実はパトスに対応する概念を見つけることも難しい、スコトゥスは、アンセルムスの有益さへの性行 (affectio commodi) と正直さへの性行 (affectio iustitiae) を語るが、パトスの抑制を基礎とする倫理的な言説は見出されないし、ストア派への対立も同意もない。

したがって、直接的な関連を論じにくいとしても、ヘンリクスがストア派について詳しく論じている以上、報告者のようにヘンリクスを媒介として論じるのは重要な方策である。ただその反面として、情念論がどのようにヘンリクスに取り込まれ、その倫理学の中に取り込まれているのかを何らかの仕方で示してもらえれば、道筋がかなり見えやすくなると思われる。

また、主意主義と主知主義の対立が、かなり現代的というか、近代的な整理であり、問題を含んでいることは、報告の中でも指摘があったがその問題点がどこにあるのか、触れてもらいたかった。自己運動や自己関係性の問題と重なってくると思われるが、どうしてもそれは「愛」の問題、しかも自己愛の問題に結びついてくる。スコトゥスの自己愛の問題は、Vos 達の対訳 (*Duns Scotus on Divine Love: Texts and Commentary on Goodness and Freedom, God and Humans*, eds. by A. Vos, H. Veldhuis, E. Dekker, N. W. den Bok & A. J. Beck, Ashgate Pub. 2003.) に示され、着目が集まっているが、その論点と関わってくると思われる。また、徳 (virtus) やハビトゥスといった論点は、倫理思想にとって重要と思われるが、主意主義と主知主義という対立図式が見落としがちなのは、愛、自己関係性、ハビトゥスといったものと思われる。

そういった論点への参入について、報告者はすでに或る程度の準備を調べていると思われるので、そういった点への説明をこれから期待したい。

以下本筋ではないのだが、いくつか細かい点での質問を記しておきたい。

- 1) 共通善と私的善の関係について、スコトゥスはどのように述べているのか。ただしこの点については、後になって論じられるからよいとしても、次の点は確認しておきたい。
- 2) 冒頭に主意主義という点でストア派とスコトゥスはどのように関連するのか、自己運動の可能性の起源がストア派にあるというのはよいとしても、その論点と主意主義が重なることについて少し説明がほしい。
- 3) ヘンリクスはキケロに類似し、スコトゥスはセネカに類似している、という整理には傾聴すべき点があると思われるが、なぜヘンリクスもスコトゥスも共に主意主義の系譜にありながら、このような違いに陥ったのか説明が欲しい。同じ質問の繰り返しになるが、要するに、スコトゥスにおけるストア派の要素はどこにあるのか。
- 4) 同じ論点になるが、主意主義の問題と共通善の問題の間には、落差があるように思われる。共同体の問題と意志という精神の能力を媒介する論点として考えられるものは何なのか。

いずれにしても、本報告はスコトゥス研究および、中世哲学研究にとって数多くの課題を開示している。到底一時間程度の報告では収まらないだけの内容を盛り込んだために、論旨を追いにくくなっているところは見受けられるにしても、大きな見通しを提示してくれたことは大きな成果だったと思われる。